



福岡銀行

企画から管理まで自社一貫システムで、
アパート事業を中心に躍進し続ける。

株式会社 成斗工務店

なるとうこうむてん

相談役

中島一成氏

代表取締役社長

中島勲氏

取引店／福岡銀行姪浜支店

■会社概要

創業:1973年(個人創業)／設立:1990年(有限会社成斗工務店)／所在地:福岡市西区／資本金:2,000万円／従業員:35名／事業内容:総合建設業、不動産業(不動産の賃貸・売買・賃貸マンションの入居者管理、その他不動産業全般、不動産ポータルサイト運営)／関連会社:株式会社ケーエヌティーホールディングス、株式会社関西成斗工務店、株式会社K・コーポレーション、株式会社トラス

会社ホームページは
こちらからどうぞ!





株式会社

本社事務所玄関前(左から中島勲社長、中島一成相談役、五島頭取)

宅地開発ブームのついで 兄弟で事業を開始、会社設立へ

私は1950年、長崎市最南端の半島・野母崎のもさきに生まれました。4人兄弟の長男の私は、ともに事業を始めた次男、現社長を務めている四男・勲らとともに、この漁師町で育ちました。家業も漁師であったため、子どもの頃から漁師になるのが当然と思っていました。転機となったのが同郷の家族が乗る漁船の転覆事故でした。漁師の仕事は天候に左右され、常に危険と隣り合わせではないか自分の家族が不幸になつてしまうのではないかと思い、中学3年生になる時に、一人で大工業を営んでいた親戚を頼つて、ここ姪浜にやつて来ました。新聞や牛乳配達、ゴルフ場などでアルバイトをしながら学費を納め、生活費を親戚に預けました。残りのわずかなお金を貯蓄して、建築の専門学校に進学。卒業後、地元の工務店で2年半、親戚の大工の手伝いを1年ほど続けたのち、独立するために一旦故郷・野母崎に戻りました。

野母崎で住宅を一人で建てたのが1973年、私が21歳の時です。建築の免許を取得し、オイルショックの真っただ中に大工業を個人創業し、再度福岡に戻りました。広島島の家具工場に働いていた弟を呼び寄せ、2人で事業を始めました。この頃は宅地開発ブームで、福岡県内

のあちこちにいわゆる「団地」と呼ばれる戸建ての住宅地が誕生していました。そのブームの中で、私は弟と一緒に労務にあたる人件費だけをもらう「手間請け」の形で、次々と一軒家を建てていったのです。「他の人が1軒建てる時間で2軒建てよう」と、現場の押し入れに寝泊まりしながら、朝6時から深夜にかけて作業を続けました。

しかし、手間請けだけではなかなか利益は上がりません。そこで材木業者に交渉し、材料の仕入れまでも始めました。そうすることで売上げが着実に伸び、売上高が1億円を超えたところで、1990年に法人化、「有限会社成斗工務店」が誕生しました。

社名の「成斗」の由来は、私の名前から「成」を、星座の北斗七星から「斗」として名付けています。北斗七星を目印に探す北極星は動かないことから、この北極星のように揺るぎない信念と、創業当初の目標を忘れずにいようという思いを込めて社名にしました。また、この北極星を意味する「ポラリス」は、現在当社の物件「ポラリスシリーズ」として使用しています。

不動産事業に進出 企画から管理まですべて自社で担う

法人化後の1995年、大学の電子工学部を



5



3 1



6



4 2





中島一成相談役

卒業し、川崎で設計などを担当していた現社長・勲が入社してくれました。勲はそれ以前から当社の事業を見て「もっと見直すべき部分があるのでは」と、アドバイスをしてくれていました。弟の能力をこの会社で活かしてほしいと思ったものの、上場企業からの転職は年収が大幅に減ってしまうこととなります。しかし、勲は「戻りましょう」と言ってくれ、現場や営業などを経て、現在は社長として頑張ってくれています。その後、1997年に株式会社で商号変更すると同時に、不動産業に進出しました。住宅は引き渡してしまつたらお客様との関係が終わってしまいますが、自社で管理することで、お客様と長い付き合いになることが最大の魅力です。最初の物件は1998年、福岡市東区下原の6戸と8戸のアパートでした。まだこの頃は、

平日は手間請けの仕事をしつつ、日曜日になると下原に行ってアパートを建てていて、そのため利益はわずかなものでした。ただそれでも自分たちが管理まで一貫してできたことは大きな喜びでした。

同じ頃には公共事業も始めています。主だった事業では、能古島展望台、西部運動公園や東平尾公園のサッカースタジアムの屋根シート工事などを、当社はこれまで手掛けてきました。公共事業を担うことは、事業を進める上で大きな信頼につながります。現在、当社の事業の95%がアパート事業ですが、公共事業も毎年継続しています。こうした事業が相乗効果を生み、おかげさまで今年3月で、管理棟数490棟、管理戸数3,260戸、駐車場管理台数900台に上っています。

当社の強みは、木造アパートを中心に一戸建住宅から商業店舗、RC（鉄筋コンクリート）造の収益ビルなどの企画から提案・販売、設計、施工、そして管理までの一貫したサービスを全て自社でできることです。とくに企画力に関しては3階建てアパートやロフト付き居室を当社が全国に先駆けて設計し、許認可を取得して建設しました。

また、2014年には、九州地区以外にも事業を拡大するべく、「株式会社大阪成斗工務店」を設立。場所は違えど、事業方針は福岡と



11 9



7



8



10

- 1.対談風景
- 2.3.4.本社上階にある入居前の賃貸用居室を見学
- 5.6.木造3階建てのポラリスシリーズ
- 7.木造2階建てのポラリスシリーズのロフト
- 8.1LDK+ロフトの賃貸型木造ガレージハウス
- 9.RC4階建て賃貸用マンションのアリエスシリーズ
- 10.公共工事実績(外壁改修工事)
- 11.企業メッセージ

株式会社 成斗工務店



前列左3人目から中島勲社長、中島一成相談役、五島頭取、森永支店長（福岡銀行）

同じで、どのくらい通用するのかは未知数でしたが、大阪から兵庫、京都へと、関西の各エリアに広げることで、事業が定着しています。現在は「株式会社関西成斗工務店」と名称を変更し、私の長男・誠二に社長を任せています。その他、アパート、マンションの管理業を手掛ける「株式会社K・コーポレーション」「株式会社トラス」などを含めて、2022年11月に持株会社「株式会社ケーエヌティーホールディングス」を立ち上げました。私が代表に就任し、グループの資産を一括管理しています。

社員一人ひとりの頑張りに 応える会社でありたい

当社では、社員の頑張りに応える給与体系を実現しています。そのためにも、まずは年2回の決算報告書を社員に公開し、経営状況を社員がしっかりと把握できるようにしています。さらには年功制と同時に、実力に応じた歩合制も採用しています。社員には資格取得を推奨しており、現在は1級建築士が2名、2級建築士が5名、宅地建物取引士が5名など、社員のほとんどが何かしらの資格を持っています。また、当社では長く務めている社員も多く、定年後に備え、アパート経営も勧めています。

これからの日本は人口が減少し、その一方で



中島勲社長

所得格差がますます開いていくと言われていますが、その中にも社員には、少しでも安定した生活を送るために、今から準備をしてほしいと思っています。

入居率の実績は最低でも98% 時代に左右されない経営を

当社の経営の主力であるアパート事業に関して、現在、オーナー様の募集はインターネットのみで、新聞への広告出稿やチラシ配布は行っておりません。ほとんどが口コミでのご相談いただいたお客様で、飛び込みの営業もありません。時代の流れもありますが、それだけ信頼を得てきた証ではないかと思っています。さらに、お客様を焦らせるような営業をすることはなく、お客様には

「他のところも見てから考えてください」とお願いしています。自社の事業に自信があるのと同時に、オーナー様の人柄を見て、その声に耳を傾けることを大切にしているのです。

さらに管理物件に関しては、当社管理の物件で入居率が98%を下回ったことはありません。オーナー様に家賃保証を依頼されることが稀にありますが、家賃保証がなくとも入居率は高水準であるため、安心してお任せいただいています。当社は自社で近隣の家賃水準を独自調査しており、適切な家賃を設定しているからだと考えています。

現在業界を取り巻く環境は、世界的な資材不足の影響もあり、建設会社各社は大きな痛手を負っています。しかし当社はそのような影響をほとんど受けておりません。毎年、数百戸もの建設を手掛けているため、エアコンなどの備品や材料は1、2年間分まとめて仕入れられるように手配済みであり、備品や材料が不足するという不安を持つことなく、新規物件の建設に着手できています。社員には常に「世の中に左右されて仕事するのではなく、常に先を見て、自分たちがコントロールするようになるう」とも伝えていきます。これからも、入居者様にもオーナー様にも、そして会社にとっても「三方よし」であり、時代に左右されずに成長できる会社であり続けたいと願っています。

■ インタビューを終えて

福岡銀行 取締役頭取 五島 久

当社は、アパート事業を中心に、企画から販売、設計、施工、管理まで、自社で一貫して手掛けることで、業界有数の高い入居率を維持されています。また、「時代の先を見る」ことで経営環境の変化にも対応し、創業以来安定した黒字経営を続けられています。

昨年11月には持株会社を設立、創業50周年となる今年3月には新社屋も竣工されました。今後とも、入居者様、オーナー様、当社にとって「三方よし」を貫きながら、次の目標である100年企業を目指し、更に発展されることをお祈りいたします。





 熊本銀行

震災からの復旧事業に取り組み、
文化と歴史を守り続けて
地域住民の心の支えになる。

宗教法人 阿蘇神社
あそじんしゃ

宮司(代表役員)
阿蘇惟邑氏
あそこれくに

取引店／熊本銀行 宮地支店

■阿蘇神社概要

所在地:熊本県阿蘇市一の宮町／職員数:13名／
国重要文化財:一の神殿、二の神殿、三の神殿、
楼門、神幸門、還御門

阿蘇神社
ホームページは
こちらからどうぞ!





拝殿前(左から阿蘇宮司、野村頭取)

阿蘇の国の開拓神を祀る神社

阿蘇神社は、周囲を雄大な山々に囲まれた阿蘇地域の中央部に鎮座しております。阿蘇は古代より神秘的な国とされ、「阿蘇を語らずして肥後の歴史を語ることはできない」といわれました。

神社の創建は、社記によれば孝靈天皇9年（紀元前282年）とあり、約2300年の歴史を有していることとなります。神武天皇の孫神であり阿蘇の国の開拓神とされる健甞龍命（たけつむらたのりかみ）を始め、家族神12神をお祀りしておりますが、健甞龍命は阿蘇を開拓するにあたり外輪山の西側を蹴破り、火口原の水を落としたと伝えられております。古来、阿蘇山火口をご神体とする火山信仰と融合し、肥後国一の宮として崇敬を集めてまいりました。

当神社は、全国に約500社ある「阿蘇神社」の総本社でもあります。当初より宮司職を世襲する阿蘇氏は、わが国でも有数の旧家として知られ、中世には武士化して肥後国を代表する豪族に成長。500社におよぶ分社が存在するのは、そうした歴史的背景がある

と考えられています。

阿蘇家の92代目当主となった私は、幼少時代は國丸（くにまる）という幼名でした。成人儀式の元服を経て、名前は現在の惟昌に変わっています。昔は元服で改名する年齢は15歳でしたが、私が改名したのは20歳の時になります。

阿蘇家では歴代当主の幼名に「丸」が入っており、元服した後の名前は「惟」を通字にします。父の幼名は潔丸（きよまる）、元服後は惟之（よしのぶ）という名前です。初代からこの慣例は続いています。

神殿と楼門などの6棟が 国重要文化財に

阿蘇神社の長い歴史において、社殿は幾度となく、自然災害などによって罹災してきましたが、そのたびに先人たちの知恵と努力によって建て直され、大切に守られてまいりました。

現在の神社のおもな社殿群は、江戸末期に熊本藩の寄進によって再建されたものです。神殿や楼門などの6棟は、2007年に国の重要文化財に指定されました。なかでも楼門は、同様の古建築では九州最大の規模を誇り、茨城県



3 1

2

鹿嶋市の鹿島神宮、福岡市の筥崎宮とともに「日本三大楼門」といわれています。

大地震に見舞われ 歴史ある社殿群に甚大な被害

国の重要文化財となり、参拝者を迎える門として多くの方々に親しまれた楼門は、残念ながら「平成28年熊本地震」によって倒壊しました。また、拝殿も倒壊するなど、重要文化財6棟を始めとする社殿群すべてが甚大な被害を受けました。

震災当時、私自身はまだ当神社の宮司ではなく、大分県の神社で神職の経験を積んでおりました。第一報を受けてすぐに阿蘇神社へと



阿蘇宮司

向かいましたが、現実とは思えないほどの惨状に、直後は思い悩む日々もございました。

ご存じのように、この熊本地震では当神社ばかりでなく大勢の方々が被災し、大変な思いをされました。そのような状況にもかかわらず、実に多くの方々が、私たちに温かい言葉をかけてくださり、救いの手を差し伸べて支えてくださいました。

地域のみならず、熊本県内各所から九州一円、さらには日本全国の思いがけない方々から励ましの声や寄付などが続々と届きました。当時、送られてきたたくさんの折り鶴と、東日本大震災で被災した宮城県の方々による寄せ書きは、今も社務所に飾っております。私たちが再び立ち上がり、再建に向けて動き出したのは、全国の皆様からのご支援とご協力のおかげです。

阿蘇神社復旧事業の長い道のり

2016年に着手した阿蘇神社の災害復旧は、大きく三つの事業に分けて復旧工事を進めました。まず重要文化財6棟については、



地域の方にとって
身近に感じられる存在を
目指し、文化と歴史を
守り続けます。



1.2.対談風景／3.4.素屋根内から復旧中の楼門を見学／5.楼門の耐震性を高めるために合計4本の鋼管柱で補強／6.国の重要文化財に指定されている一の神殿(左)、二の神殿(右)、三の神殿(奥)／7.震災時に宮城県から送られてきたメッセージ／8.阿蘇神社からのメッセージ





前列左2人目から阿蘇宮司、野村頭取、信國支店長(熊本銀行)

2016年から2018年までの工事を第1期、2019年からの工事を第2期と位置づけ、国・熊本県・阿蘇市の補助金を充当した事業として保存修理工事を実施しています。

その他の拝殿と齋館は、寄付金が税控除される特例制度を活用した指定寄付金事業として、復旧と再建工事を実施しました。さらに、鳥居や回廊など、その他の諸施設については、一般の寄付金と自己資金を充当した事業として復旧再建工事を実施しました。

神殿の工事では、被害の大きかった「三の神殿」から取りかかり、「二の神殿」「一の神殿」へと進めていきました。幸いに倒壊には至らなかったため、文化財の価値が損なわれないよう部分的な解体修理がおこなわれました。あわせて神殿の床下には方杖ほうじえという斜め材を取り付けて耐震補強も施しています。

楼門の復旧においては、倒壊した状態からいったん解体し、部材を修復しながら再利用することで昔の姿を残したままになっています。その中で耐震性を高める工夫として、4本の鋼管柱を通したことで地震に耐える安全性を確保しています。

また、指定寄付金事業として実施した拝殿の再建については、当初は海外産の木材を用いる計画で進めていたのですが、「地域に根ざした神社には地元の木材がふさわしい」というご意見が寄せられ、見直すことに。

幸いなことに、熊本県立阿蘇中央高校から用材ご寄贈のお申し出があり、また阿蘇森林組合が用材調達にご尽力いただいたお陰で、結果的に拝殿の用材は、約8割を熊本県産材、そのうちの5割を阿蘇地域材にすることができました。これにより「郷土色を体現した復興事例」として評価をいただきました。

拝殿は、多くのご支援、ご協力のおかげで2021年7月に竣工。復旧工事の最終段階に入った楼門は現在、素屋根の解体を進めており、地震発生から8年経った今年末の工事完了を目指しています。

震災とコロナ禍を経験して あらためて知る神社の役割

熊本地震は、神社の歴史を揺るがした、思いもよらない出来事でしたが、その後「コロナ禍」

という、世界中を巻き込む思いがけない事態がやってきました。

農耕の開始期におこなわれる「田作祭（火振り神事）」、田植え期の「おんだ祭」など、神社が中心となり年間を通じておこなう農耕神事では、氏子を始めとする地域の皆様のご協力により規模を縮小し神事を進めてまいることができました。

コロナ禍や自然災害を経験し、私たちは神社の存在意義についてあらためて考えるようになりました。氏子の皆様のなかには「震災の時は、神社が身代わりになってくれた」とおっしゃられる方もいらっしゃいます。今後、地域の皆様の心の拠りどころとしての神社を大切に守ってまいりたいと思っております。

支えてくださったすべての方々へ感謝し、御社殿の完全復興と皆様の幸せを願いつつ、日々努めてまいります。

■ インタビューを終えて

熊本銀行 取締役頭取 野村 俊巳



わが国における有史以前からの歴史をもつ古社である阿蘇神社は、肥後国一の宮として崇敬を集めてきました。宮司職を世襲する阿蘇家の現宮司は、記録の残るところから数えて92代目となり、阿蘇神社の文化と歴史を守り続けておられます。

平成28年熊本地震では、重要文化財となっている神殿などが被災されましたが、多くの支援に後押しされて今も災害復旧事業が進められています。今年末の楼門の復旧完了が待ち望まれるところですが、これからも末永く、地域住民の心の支えとなり、阿蘇の象徴であり続けてほしいと願っています。



十八親和銀行

強みである特許技術を駆使し、

日本全国の

港湾インフラ整備に貢献する。

福丸建設株式会社

代表取締役社長

増田貴光氏

取引店／十八親和銀行 佐世保本店営業部

■会社概要

創業:1973年／設立:1976年／所在地:長崎県
佐世保市／資本金:2,500万円／従業員:61名
(2023年4月現在)／事業内容:砂岩浚渫工事、
一般土木工事、内航運送業、港湾土木工事、
とび・土工工事、船舶仲介、サルベージ工事、
測量・設計・施工、クレーン作業

会社ホームページは
こちらからどうぞ!





海底を掘削する浚渫船
「第22福丸」前
(左から増田社長、山川頭取)

海運事業で創業し 浚渫工事を軸に発展

当社の創業は1973年。私の父増田福一が、佐世保で海運会社「福丸海運」をその年に起こしましたが、その福一が海運事業を起したのもまた、福一の父、つまり私の祖父・福蔵が故郷・五島の若松瀬戸の高仏という地域で造船会社と海運会社を営んでいたことがきっかけでした。

福蔵が経営する会社は、日本の高度成長期とも重なって、博多との交易が盛んになり五島・若松随一の会社となります。ところが会社の全財産ともいえる機材を載せた船舶が、港の防波堤に着岸しようとした瞬間、海中の突起物に衝突しすべてを失ってしまいました。福蔵の家族はそこから一気に貧しくなり、福一は五島での生活をあきらめて中学卒業と同時に佐世保へ移り住むことにしました。福一は佐世保で職を探し、リヤカーで鉄スクラップを集め、それを売って生計を立てつつこつこつ資金を貯めていました。そうしたある日、リヤカーを引いていると佐世保川の中に沈んだ船を見つけます。船を川から拾い上げ、まだ使えると判断すると、所有者を見つけ出して譲ってもらいました。その船に五島から焼玉エンジンという旧式エンジンを取り寄せて積み、船に「福丸」と名付けました。

それが当社の社名の由来です。その福丸で海運業を始め、佐世保港と西彼杵半島の北西にある崎戸島との間で物資を運びました。今は長崎県内をはじめとして日本全国で企業活動を展開する当社ですが、創業までにはこうした苦労の積み重ねがあったのです。

当社が港湾や河川の水底に積もった土砂などを取り除く浚渫事業に着手すると、佐世保港を拠点に長崎県内の商工業港、漁港、河川などでの浚渫工事が中心となりました。

当社が得意とする浚渫工事は、現在売上の80%近くを占めていますが、見えない水中を掘削するため、数ある土木工事のなかでも最高難度の技術が要求される工事とされています。具体的には、地質、地形に応じた施工機械の選定、気象・海象条件の把握、航行船舶への影響を最小限に抑えるための施工方法の検討といった総合的な判断が不可欠となります。

さらに、浚渫工事の生命線ともいわれるほど重要なのが、正確な水深計測です。たとえ施工面積が数万㎡にもおよぶ大規模工事であっても、許容される施工誤差がわずか20cmという現場もあります。大型重機を装備した浚渫船を用いる浚渫工事自体は、見た目には大掛かりでダイナミックである一方、その裏では緻密な計算と卓越した技術が求められています。



必要に迫られて特許技術を開発 全国屈指の砕岩能力を誇る

河川、ダム、海域などで水底の土砂をすくって取り除く浚渫工事ですが、このような工事には必要とされる理由があります。

港湾や河川などでは、水流によって運ばれてきた土砂が少しずつ底に積もっていく動きが絶えず起きています。河川部では、浚渫によって川幅を拓げる、あるいは水深を深くすることで川の流れをスムーズにして、洪水による水害を防ぐ結果につながります。海域においては、浚渫工事によって航路や港湾部の水深を確保することで、座礁等の事故を防止します。また、柔らかい土砂を取り除けば、防波堤等の構造物の沈下を防ぐのに役立ちます。

そのうえ、浚渫によって取り除いた土砂は、空港造成などの埋め立て、漁礁などに再利用できるのです。



増田社長

それほど社会に不可欠な浚渫工事を、私たちは使命を感じながら佐世保の地で始めて、社業の柱として成長させてきたわけですが、あいにく佐世保周辺は、柔らかい土砂の下に固い岩盤もあるという場所が少なくありません。浚渫も効率よく進めるためには、砕岩技術も重要になるといっわけです。

そこで、必要に迫られた当社では、従来品とは異なる道具を開発しました。岩盤へ打ち込んで砕く砕岩棒の刃先を従来のものより鋭角にするると同時に、より平らな形に変えて、岩盤へ奥深く食い込んで大きく割れるよう改良しました。性能を向上させたことで、打ち込み時の振動を抑えつつ水の濁りも少なくなりました。これは当社の誇る特許技術となっています。

特許技術ではまだあります。水底から土砂をすくい上げるためのバケット（土砂などを掴み上げる部分）は、汚泥や有害物質の除去にも使われるため、密閉性が必要なのですが、水中へ沈めると浮力が働いて目標へうまく着地できない場合があります。当社では、独自の空気抜き機能をもたせて、密閉性を確保しつつ空気抜きや水抜きができるバケットを開発しました。

こうした技術開発と数々の施工実績が評価されて、現在では県外からも声をかけていただくようになり、日本全国に活動の場を拓けていきます。



現場で培われた
高度な技術と経験で
日本の海洋土木を
支える存在に。

11 9



7

10

8

- 1.対談風景
- 2.浚渫船「第22福丸」を見学
- 3.巨大な工用ブイ
- 4.巨大なバケット
- 5.クレーンの操縦席
- 6.巨大な砕岩棒
- 7.特許技術の密閉式バケット
- 8.特許技術の砕岩棒
- 9.佐世保港三浦岸壁の改修工事（ジャケット製作）
- 10.東日本大震災後の復旧工事
- 11.企業メッセージ



本社前。前列左から片山管理部長、増田^{ししかず}専務、増田貴光社長、山川頭取、谷口佐世保本店営業部長（十八親和銀行）、岩崎佐世保本部長（十八親和銀行）

高度な独自技術を活かして 震災後の港湾復旧に寄与

これまでの県外での活動でとくに印象に残っているのは、東日本大震災後の復旧工事です。被災した港湾部再建のため九州の建設会社としては1番初めに青森県の八戸漁港に向かいました。当社の岩盤破碎技術が買われて、いち早く現地からの要請があつたためです。

その後も、岩手県釜石港のギネス登録されていたスーパ防波堤撤去工事や田老漁港^{たろう}、只出漁港^{ただい}、長部漁港^{ながべ}、宮城県の石巻工業港^{いし}、女川漁港^{めづ}、福島県の相馬港^{そうま}と、震災が発生した2011年から2014年まで復旧工事は続きました。

当社では砕岩・浚渫工事、佐世保港を始め、神戸港や羽田空港D滑走路などの工事にも従事してきた経緯があり、日本各地へ赴いてさまざまな工事に携わりながら鍛えてきた機動力を震災復興にも役立てられたのではないかと思います。

私が父から社長を引き継いだのは2012年で、ちょうど震災復興のための工事に従事して東北各県へ赴き続けている時期でした。佐世保で生まれ育ち、広島の土木工事で5年間勤務した経験をもとに、当社に入社して営業課長を務めていた矢先、先代社長の健康上の理由から社長に就任する運びとなりました。営業課長から一気に社長へ、最初は苦勞もありましたが、

入社以来長く作業船で勤務して身に付けた現場感覚は、社業と業界を深く広く知ることができていたことが、経営の舵をしっかりと切れる原動力になったと実感しています。

SDGs達成のための積極的な取り組み

当社では、31隻にのぼる保有船と特許技術を活かした浚渫工事以外にも、港湾土木、陸上土木を手がけており、さまざまな実績を積み上げてまいりました。たとえば、佐世保港の岸壁改修工事や長崎北地区広域漁場の整備工事、佐世保工業団地の造成工事、佐世保駅周辺や主要地方道の道路改良工事から市役所前広場整備、歩道橋整備、小学校校舎の解体工事といったまで、多くの方々の暮らしに関わる施設や建造物の整備に関わっています。

また当社は、国土交通省による「みなとSDGsパートナー登録制度」に登録されている企業でもあります。この制度は港湾事業者を対象としたSDGs達成への取り組みを支援する制度で、港湾事業者としての社会的使命を果たしていくとともに持続可能な社会の実現に貢献すべく活動を進めています。

たとえば、カーボンニュートラルの観点からCO₂の排出量を抑えるために作業船のエンジン

や補助発電機の運転時間を短くする操業スタイルに切り替えたり、錆びやすい鉄製のボラード（船を繫留するために岸壁に設置する杭）の表面をステンレス製に切り替えて接触するロープの摩耗や劣化を防いだり、社屋にソーラーパネルを設置して太陽光発電で必要な電力をまかなう、といった取り組みをおこなっています。

さらには、土砂処分施設の増設などに関して、港湾事業の現場で上がる声をしかるべき行政機関に届ける提言活動にも力を入れ、実現しています。

未来のために今できる全力を

当社が掲げているスローガンは「未来のために今できる全力を」。先に挙げた「みなとSDGsパートナー」としての活動もその一環と言えますが、私たちは地域社会の一員として、次世代を担う人たちのためにできることを常に考えています。

長崎県は海岸線延長が4,203kmと、北海道に次ぐ全国2位であり、さまざまな海洋資源が豊富で、潜在的な可能性をまだまだ多く秘めています。それゆえ、洋上風力発電や潮流発電といった再生可能エネルギーの導入ポテンシャルが高いとも言われています。

地域の未来を見据えて、社業を通じた人材育成、地域社会との連携による相互扶助の仕組みづくりにも力を注いでいく所存です。

インタビューを終えて

十八親和銀行 取締役頭取 山川 信彦

日本の高度経済成長期直後に佐世保で創業され、佐世保港を拠点に、全国の港や河川等の浚渫工事等に携わられています。さらには建設分野にも軸足を移して、県内外で施工実績を積み重ねて、創業50周年を迎えられました。

砕岩と浚渫の特許技術によって高い評価を獲得した結果、現在では日本全国を舞台に活動を展開されています。東日本大震災後の復旧工事においても多大な貢献をされておられますが、次なる50年、100年企業を見据えて、ますます発展されることを願っています。

